

科学・技術・社会の相互作用から未来を予測する「サイニック(SINIC)*理論」

立石一真は、「事業を通じて社会的課題を解決し、よりよい社会をつくるにはソーシャルニーズを世に先駆けて創造することが不可欠になる、そのためには未来をみる羅針盤が必要だ」と考えました。そこで、科学・技術・社会それぞれの円環的な相互関係を人類史の始まりから分析し、未来を予測するサイニック理論を1970年に構築し、国際未来学会で発表しました。以降、オムロンは、これを未来シナリオとし経営の羅針盤とし続けています。

サイニック理論の基本的な考え方は、科学・技術・社会が相互に作用しながら発展していくというものです。情報化社会を例にとると、1940年代に勃興した総合科学であるサイバネティクスやコンピュータ科学の発展が、新しい電子制御技術、プログラミングなどの種(シーズ)となり、パーソナルコンピューターやインターネットの普及を通じて、情報化社会が実現しました。一方、情報化社会が発達し、より多くのデータを正確に素早く分析・解析したいという社会の必要性(ニーズ)が、

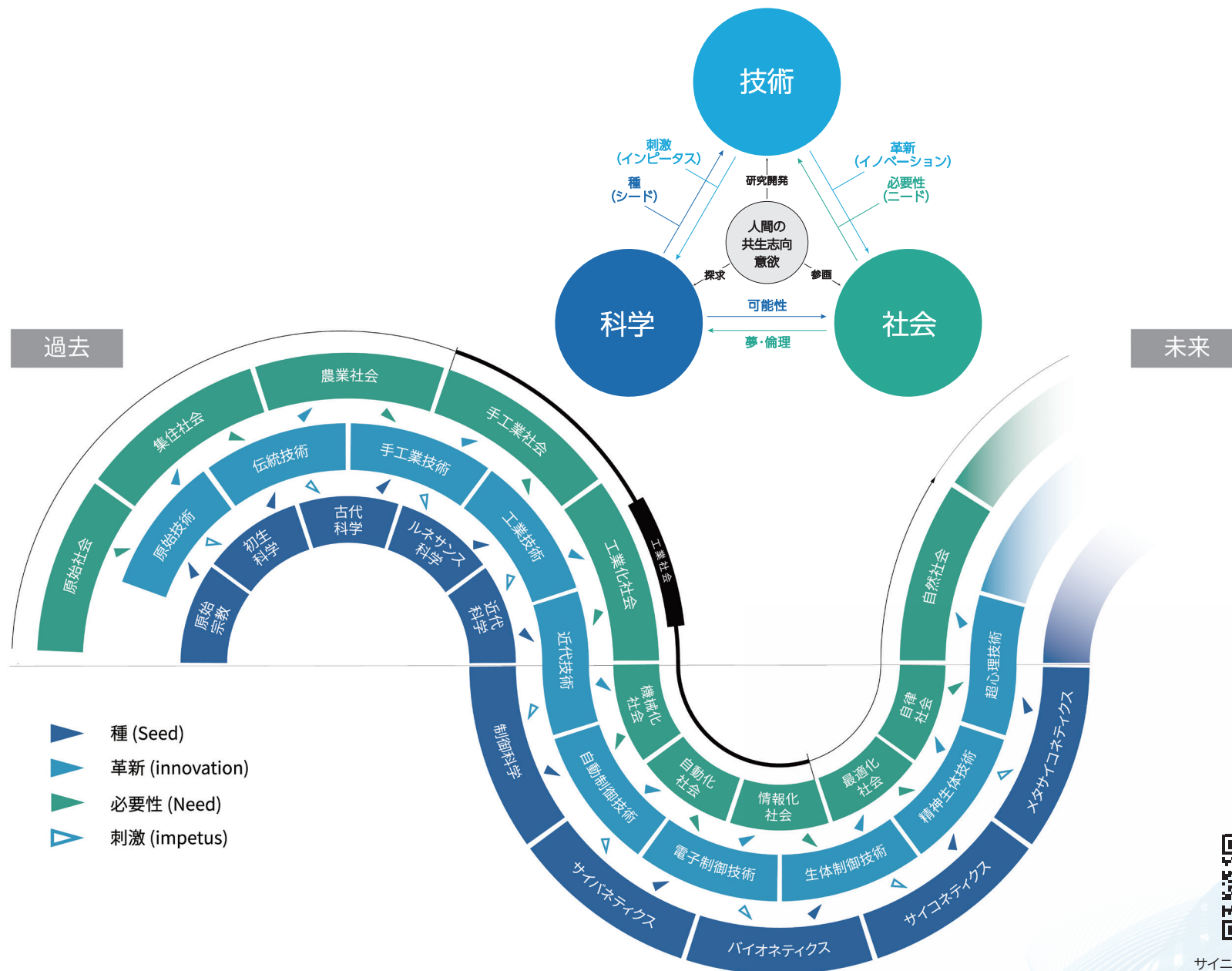
CPUやGPUなどの処理装置の性能を向上させ、ディープラーニングなどの人工知能(AI)技術の進化を促し、脳科学や認知科学の新たな展開を刺激していることも挙げられます。

そして、「最適化社会」の現在は、工業社会から自律社会へと向かうパラダイム・シフトの時代です。再び戦争や紛争が発生したり、想定外の感染症発生や、気候変動による大規模な自然災害、大量生産・大量消費・大量廃棄型の経済成長システムの限界、AIやロボット技術による不安など、世界は今、まさに葛藤と渾沌の「最適化社会」の渦中です。そのために、世界中で未来への不安や悲観ばかりが目立つ一方です。最適化社会では、SDGsも含めて、これまでの工業社会で解決しきれずに貯めこんできた負の遺産の解消が大きな社会課題になっています。しかし、最適化社会は、過去に貯めこんだ課題解決だけがテーマではありません。自律した個が自らの力を存分に発揮しつつ、相互に頼り合い、助け合って創造的な生

き方を実現できる「自律社会」へのソフトランディングに向け、未来社会への新たなソーシャルニーズ創造への仕込みも大事です。持続可能性への課題解決と、未来可能性への価値創造の両輪を駆動させることが、最適化社会の特徴です。オムロンでは、SINIC理論を経営の羅針盤とし、「個人と社会」「人と自然」「人と機械」が最適なバランスをダイナミックに保ちながら融合する技術を開発して、自律分散型の未来、よりよい社会づくりに取り組んでいます。

一方、科学技術の発展と社会変化のスピードが加速する近未来に向けては、これまでのように1つの企業や組織だけでよりよい社会を実現することは困難です。自律した企業が連携して創造する、そのような共創の取り組みが重要になります。そこで大切なのは、共創の担い手を結ぶ「共感」の核となる未来ビジョンです。オムロンでは、SINIC理論の未来観をオープンにして、共感の輪を拡げよりよい未来社会の共創を進めます。

*サイニック(SINIC): Seed-Innovation to Need-Impetus Cyclic Evolution の略



サイニク理論の詳細は、こちらをご覧ください。